

新潟県が進める「社会性の育成」

体育祭は昨日無事に実施できました。多くの皆さまのご参加ありがとうございました。その内容は次号にてお知らせします。

新潟県は社会性の育成を推進しています。以前、いじめや不登校、暴力行為などの問題行動が頻発した時に、背景の一つに「社会性の不足」があると考え、学校教育全体を通して社会性の育成を推進してきました。県の教育振興基本計画にも盛り込まれています。

特に当校のような小規模校では、関わる人間が固定的になりがちで、様々な取組を通して「社会性の育成」を推進することが、大きな教育課題の一つだと考えています。

本県においては、児童生徒に身に付けてもらいたい**社会性**として、4つあります。

「自己有用感」
「人間関係づくりの能力」
「規範意識」
「困難に対して、他者と協力しながら問題解決を図る意欲や態度」



教育活動全体を通じて児童生徒の社会性を育成するとともに、家庭や地域との連携を強化していくことが重要です。今回は「自己有用感」「人間関係づくり」について説明します。

「自己有用感」と「自己肯定感＝自尊感情」について

平成27年3月に国立教育政策研究所から発行された「生徒指導リーフ」の『自尊感情』？それとも『自己有用感』？」の中には以下のように説明されています。

「自己有用感」とは、他の人の役に立った、喜んでもらえたなど、自分と他者（集団や社会）との関係を肯定的に受け入れることで生まれる評価です。

「自尊感情」とは、Self-Esteem の訳語であり、自己に対して肯定的な評価を抱いている状態、自分自身を価値ある存在として捉える感覚です。「自己肯定感」とも呼ばれます。

人の役に立った、人から感謝された、人から認められた、という「自己有用感」は、自分と他者（集団や社会）との関係を自他共に肯定的に受け入れられることで生まれる、自己に対する肯定的な評価です。

○日本の児童生徒の場合には、他者からの評価が大きく影響する。

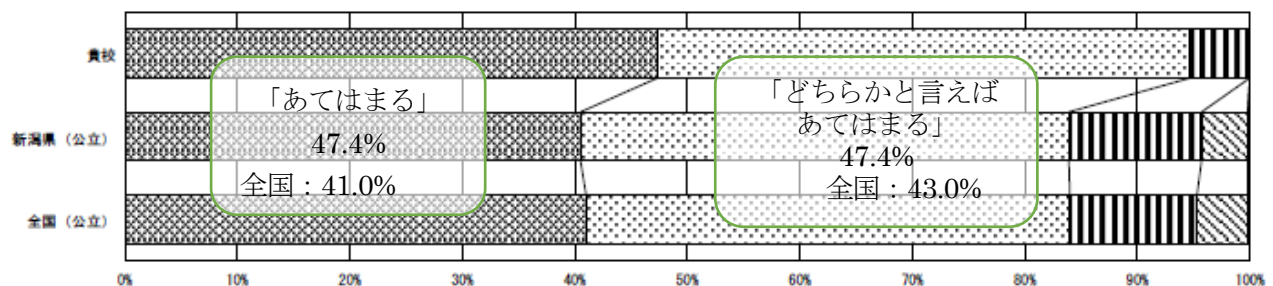
○「褒めて（自信を持たせて）育てる」という発想よりも、「認められて（自信を持って）育つ」という発想の方が、子どもの自信が持続しやすい。

「自己有用感」は「他者からの評価が大きく影響する」点がポイントです。



当校の社会性の実態について（全国学力・学習状況調査の結果より）

質問「自分には、よいところがあると思いますか」



この質問の回答の結果から、当校生徒の「自己肯定感」の肯定的評価は、94.8%で、全国平均、県平均を大きく上回っています。(県 83.9%、全国 84.0%) また、校長室だより第 19 号で紹介した「人が困っている時は進んで助けていますか」という質問は「自己有用感」に関わるものであり、肯定的評価が 94.8%だったことから、どちらも高い状況にあります。

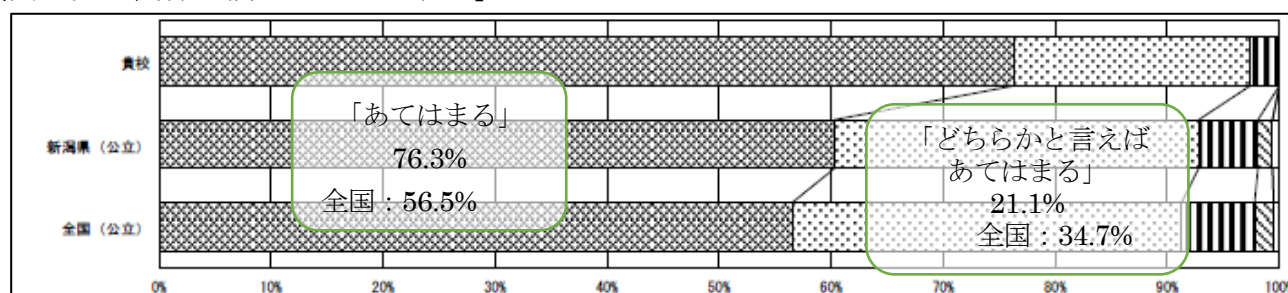
今回紹介できませんが「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」の質問も自己有用感を図るものであり、肯定的評価が 100%で、他者との関係性の良さが見られます。

2 学期は大きな学校行事が控えています。行事は、社会性の育成、特に自己有用感を高める絶好の機会であると考えます。学校行事は、自分のためだけでなく仲間のために力を発揮し、「自分は誰かの役に立っている」と実感できる場です。



社会性の「人間関係づくりの能力」について

質問「友達関係に満足していますか」



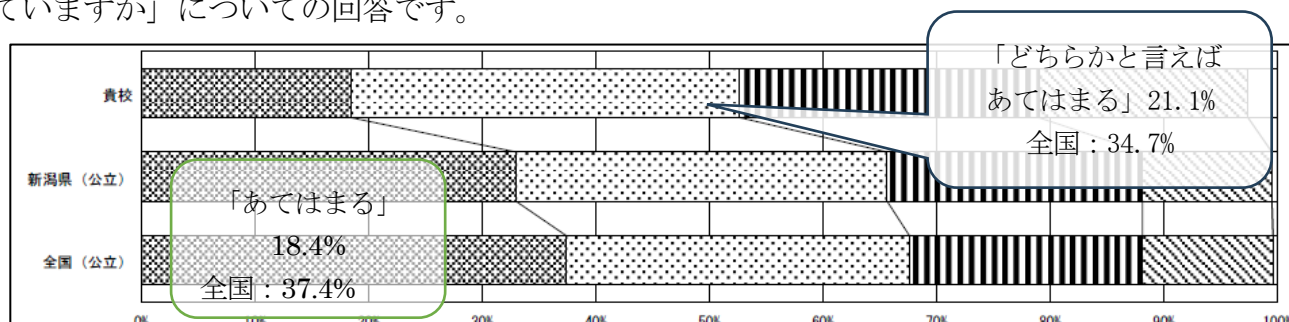
当校の生徒同士の人間関係は概ね良好だと思っています。ただ、「固定的な限られた人同士だからでは」と感じることもあります。いつも一緒にいる人とうまくいかなくなると「どうしたらいいかわからない」と訴える人もいます。

中学卒業後はそれぞれの進路で、多様な人たちと関わらなければなりません。新たな人間関係を築く術を知っておく必要があります。2 学期も外部講師を招聘して、人間関係づくりのトレーニングの機会を設けます。



全国学力・学習状況調査の結果から少し気になること

今回の意識調査の中で、一つだけ気になることがあります。質問「将来の夢や目標を持っていますか」についての回答です。



この質問について、今年の 3 年生は、県、全国平均、昨年度までの結果と比較しても低い状況です。これをどう分析すべきでしょうか。「将来について漠然としており、具体的なことに絞り込めない、分からない。」「高校などの上級学校に進学してから決める。」「将来についての情報が足りない。」などが予想されます。

3 年生はとても意欲的に学習に取り組みます。そのことから総合的に考えると、将来像を現実的・慎重に捉えている生徒が多いのかなと思います。今後は、多様な生き方や社会との接点を増やし、様々な経験の中で、自分の学びがどのように社会や人の役に立つのかを実感しながら将来の設計をしていくことが大切なのかなと思います。